こしやの光

三相の巻

大經發起序……一
三相五德……六
三相……一一
五德……一九
日世尊住奇特法……一九
法身佛世尊奇特の法……二一
報身の世尊と奇特の法……二五
應身の世尊と奇特の法……三一
信仰に現る々奇特……三九
彌陀の光明に滿れたる釋尊……四二

大經發起序

爾時世尊諸根悅豫し姿色清淨にして光顏巍々たり。

尊者阿難佛の聖旨を承けて卽ち座より起ちて偏袒右肩し長跪合掌して佛に白して曰く、今日世尊諸根悅豫し姿色清淨にして光顏巍々たること明淨なる鏡の影表裏に暢るが如し、威容顯曜にして超絕したまへること無量なり。未だ曾て殊妙なること今の如くなることを瞻たてまつらざりき。唯然大聖我心念言すらく今日世尊奇特の法に住し、今日世雄諸佛の所住に住し、今日世眼導師の行に住し、今日世英最勝の道に住し、今日天尊如來の德を行じ玉へり。去來現の佛佛と佛と相念じ玉ふ今の佛も諸佛を念じ玉ふこと無きことを得んや。何が故ぞ威神の光々たること乃ち爾るや。

爾時に佛陀世尊は青蓮の眸淸らけく丹果の唇にまで笑を含み悅豫しき姿色の淸らけき光顏の巍々たること言ふ可からざりき。世尊の表情を瞻奉りし數多の中に弟子學者なる阿難は佛陀の聖旨を拜承して卽ち座を起ちて右の肩を（祖）あらはし長跪合掌して佛に奏して曰ふには、今日世尊は諸根に悅豫しきを表はし、姿色の淸らけき光顏の巍きこと、明淨なる鏡の影が表と裏とに暢るばかりに威容顯曜に殊に勝れたまふこと極みなし、昔より未だ斯ばかりに殊妙なることを瞻奉りしことなかりき。唯々然り、大聖なり、我心に思へらくは今日世尊奇特の法に住ましたまひ、今日世雄諸佛の所住に住し、今日世眼導師の行に住まりたまへり。今日世英いと勝れたる道に住し、今日天尊如來の德を行じたまへり。過去と現在と未來との佛、佛と佛と相念じたまふ今世尊に於れても佗の佛を念じたまふこと無邊なり。如何なれば威神の光耀くこと爾したまふものぞと。ここに世尊は阿難に告げ給へるは、如何ぞ阿難汝は諸天の敎を受けて斯は我に問ふものか、將た自己の慧見をもて威顏の表情を問ふものなりや。阿難佛陀に白し奉りけるは、諸天の敎を受けて斯問ひ奉るにはあらず、自己の所見を告げて斯義を問ふのみと。佛言けるは阿難快よくも問ひけるよ汝が深き智慧と眞妙の辨才あることよ、衆生を愍みて能く斯の義を問ひけるぞ。實に如來は無盡の大悲あり、三界の人々を矜れみてこそ此世に出興して光く道敎を闡き群萌を拯はばやと思ふて、眞實の利を惠み施さんとし、無量億刼にも値ひがたく見難き靈瑞華の時ありて出づるに譬ふべく今汝が問ふ所は世を饒益するところ大なり。一切の諸天人民を開化することにぞ、阿難よ確かに知れよ、如來正覺は其の智無量にして導御するところ多し慧見は無碍にしていかなる物も遏絕することはなし。一喰の力にて壽命を住むること億百千劫無數無量にして此れに過ぎたり。五根は悅豫して毀損することなく、姿色は變ることなく光顏は永しへに異ることなし。いかにとなれば如來は定と慧と究暢して極みなく一切の法に自在を得たまへばなり。

佛陀世尊は經を說くに因緣を待つて說法なさる。例せば觀經の如きは王舍城主沙羅王の夫人韋提希が其太子闍世が逆意に依り慘憺たる逆境に陷り天地間に寸隙もなき苦境中に唯釋尊の慰諭を仰ぐ外に道なきことを感じて幽閉せられたる深宮に於て世尊の哀憐を仰ぎ奉れるに、世尊は其を哀みたまひて靈鷲山より韋提希の所に現じ玉ひて爲めに彌陀の慈悲を聞きて韋提希をして無生忍を悟人せしめ凭る苦境中に精神的に極樂に生ぜしめ玉へり。

今經は敎祖自ら彌陀三昧に入り彌陀大光明中に融合三昧したる精神は、身は斯土に在て心は淨土に在り。敎祖の意一切の人類をして念佛三昧に依りて精神的に靈的に復活せしめんが爲に斯經を說き玉へり。（念佛三昧の法を以て彌陀の光明を得れば精神が生れ更りて麗しき）

大乘佛敎は凡て釋尊が三昧に入て其定中の所驗を所化の衆生に說示し玉ひしなり。斯經は佛陀が身心寂靜に彌陀三昧に入り玉ふ釋尊の定心中に一點の片雲なく靑天に太陽の赫々たる如く唯彌陀光明普く十方を照し淨土の莊嚴は地より虛空に至る迄極美究妙たるを觀玉ふのみ。喩へば淨界彌陀の日光は人佛釋迦の淨滿月に映現す。彌陀萬德の光明は三昧定中の釋尊の心に實現す。此に於て諸根悅豫等の三相と現奇特等の五德と現じたのである。

釋尊が最圓滿なる宗敎心の圓滿たる容、受用法樂に充ち玉へるを示して一切の人々をして彌陀の光明に靈活せしめて微妙喜樂と最圓滿なる靈の生活に入らしめんが爲に其範を示し玉へるなり。云ひ換ふれば今此敎に依て彌陀に靈化せられたる人は常に最も麗しき信仰の生活となることが得らるるものなり。我其の模範なりと示されたるなり。敎祖の現し玉へる三相五德は念佛三昧に依りて彌陀の靈光に映現したる釋尊の人格內容にして、而かも一切衆生が此三昧を得れば必ず分に應じて靈德に充たされ靈に復活せらるるものである。三相五德の諸根悅豫等の三相は彌陀の靈德に實現し居

る釋尊の色身に現じたるにて奇特の法より天尊如來の德を行じ玉ふ五德は彌陀の心德が釋尊の靈意に現じたるもの、是敎祖が我曹をして念佛三昧を修め彌陀に靈化の妙用を以て吾等を心靈に活かさしめんためなり。此斯經の宗趣ここに存す。

三相五德

敎祖が彌陀三昧に入りて現じたる三相五德は吾人の爲に宗敎に依て靈に活くべき範を示し玉へる人の身體と精神の生活上最至要なる德相なり。此三相五德、若しは全、若しは分に、具はりて初めて眞の信仰生活に入りたる人即ち靈に活ける徵候なり。人間は小天地なり。大宇宙を縮少をる小天地なり。大宇宙法界に有ゆる萬德は此小宇宙に縮少して有て居る。大宇宙全體を人格と信ずる。法身毘盧遮那如來と名づく、其全體中の中心眞髓とし萬德圓滿の全的人格顯現が即ち報身の淨滿如來なり。其淨界の報身から分身して人類に應同する身を以て報身の萬德を個體の身上に如して現はれたのが應身佛即ち釋尊なり。釋尊が完全なる圓滿なる模範を示して人類の敎主と顯現なさし、我等衆生は本法身より稟けたる性即ち縮少せる小法身なればいかに微少なるも法身より稟けたる伏能を有つて居る。此伏能を遂性的に實行すべき妙行が即ち念佛三昧なり。念佛三昧は我等が法身より稟けたる佛性の卵を孵化すべき唯一の妙法なり。念佛三昧は即ち報身光明に攝化せらるる契機なり。釋尊此土に出でたまふ本懷ここにあり。

經に如來無盡の大悲を以て三界を矜哀し、所以に世に出興して道敎を聞き群萌を拯んと欲し惠むに眞實の利を以てす。乃至一切の諸天人民を開化すと。

敎主釋尊が自ら彌陀三昧に依て成佛したる範を示し玉へり。彌陀の靈德に攝化せらるゝ理に於ては同一なれども、所化の衆生の機類は同じからず。喩へば同じ日光の反映たる月にも盈缺の別ある如く、同じ彌陀の日光が淨滿月に映現したのが釋尊にて觀音勢至は十四夜の月にて新發意の人は新月に例ふべし。

三相と相好

佛陀は三十二相八十種好具足し玉へり。相好と今の諸根悅豫等の三相の異る所以は相好は佛の無量の功德の積集より形成せられたる結果として生得の形態の相にて、今の三相は靈的生活内容活動の現相なり。相好は骨相にて三相は血相の如く、相好は解剖學的にて、三相は生理的、相好は固定的三相は變化的にあり。凡夫の姿色は外界の刺戟に應じて忽ちに變化す。若し罵詈讒謗等に遇へば忽ちに憤怒を起して姿色赤夜叉の如く若し非常なる怖畏すべき緣に待せば蒼白色と變ず。凡夫の心情は歷緣對境内面の感情は忽ちに容貌に現はる。然るに敎祖の如く彌陀の靈光に充滿せらるゝ時はいかなる境遇に臨んでも心情常に平和なるが故外貌また異ることなし。

三相五德の古師の判釋

宗敎は時機相應して行はるゝと古人の云ふ如く、經の判釋また必ずしも同一にあらず。從來の超然主義と今圓敎の精神主義とは大に異る處なり。古來の諸師諸根悅豫等の三相に對して云はく、如來は實に歡感なしと雖も本意を顯はす爲めに悅喜の相を示現し玉ふ。其故は釋尊の大悲偏に常沒の衆生にあり。常沒の衆生の出離は唯往生淨土の佛願にあり。今將に出世の本懷なる彌陀の本願を宣說し衆生の往生することを悅豫し玉ふ現相なりと。從來諸師の意、釋尊が彌陀の往昔の發願を憶ふとまた西方遙遠の彌陀の慈悲を念ふて過去的の佛を念ふて衆生が彼處に往生することを憶念するが故に釋尊悅豫の相を示されしと解せり。夫れ或は然らん。然れども今吾人の精神主義は然らず斯悅豫の相を現じたるは、

今現に釋尊三昧中の彌陀の慈光に充滿さるゝ故に淨滿月は正しく日光の映寫たる如し。今現に淨界に顯赫として照曜する彌陀の靈光顯現せる釋尊の現相なり。經に、阿難が世尊に白して曰く今日世尊諸根悅豫し姿色淸淨にして光顏巍々たること明淨なる鏡の影表裏に暢る如し、威容顯曜にして遇絕し玉へること無量なりと。是正しく釋尊三昧定の心鏡に彌陀の大威神光明が映寫したる相なり。往昔の敎祖のみならん

や、各自敎祖の範に則り念佛三昧を以て自己の心鏡を磨き觀よ、彌陀の心光忽ちに映寫し、諸根悅豫姿色淸淨の三相は現在自己の心身に實現せん。觀經に自ら明鏡を以て自己の面像を視るが如しと。亦此類也。

三味の解

三味とは梵語にて、等持定と譯し、等持定とは心鏡明なる時に對象其に影現す。心形相合して影現す。衆生の心鏡に如來顯現す。鏡は影像を映す。衆生信心の鏡は全く如來心と合して不一不異の關係を以て如來の靈德に自己の心性は靈化せらる。中秋天に輝ける滿月は日輪の映現たる如く、釋尊滿月の光は彌陀日光に依る。衆生の心は本闇黑なること晦日の如し。彌陀の日光に映ずる時は明態となる。念佛三昧は我等が闇黑なる心を彌陀の靈光に合一するにあり。然る時は光明には闇黑を照破するの增上緣力あり。光明と闇黑と合する時に闇黑は光明を破ること能はず。光明は必ず闇黑を破する力用ある如く、我等が無明の闇深きも如來の光明に合する時は必ず照破せらる。

三相

彌陀の靈德に充されたる釋尊の形色の相に三あり。一は諸根悅豫、二は姿色淸淨、三は光顏巍々、是彌陀の日光に反映せる釋尊の色身の相である。

一諸根。五根及び三十二根等の一切の全身に渡れる身分、腦髓神經生理、皮膚筋肉筋骨等の一切の生理器械及び機能が能く三味練習に依て調練し如來の靈能と調合すべき機能を適合するにあり。

諸根調伏

念佛三味を以て此身は彌陀の靈應を容るべき聖壇である。彌陀を安置すべき器となれば身機能く調伏せざるべからず。焉に於て諸根を調整すべき必要がある。定を以て能く精神を整ふ時は眼耳等の五根も自づと調ふ。故に佛陀は能く五根を制すべく勸め

給ふた。遺經に能く汝等比丘能く戒に住せば當に五根を制すべし。放逸にして五欲に入らしむること勿れ、譬へば牧牛の人の杖を執つて之に視して縱逸して人の苗稼を犯さしめざる如し、若し五欲を縱にすれば唯五欲の將に崖畔無うして制すべからざるのみに非ず亦惡馬の轡を以て制せざれば時に人を牽きて坑陷に墜すべきが如し。乃至是故に智者は制して隨はず之を持すること賊の如くして縱逸せしめず。

釋尊は能く五根を調伏して動轉輕躁の擧動毫も在まさず。釋尊諸根寂靜にして坦然端正なるを拜する時は衆生自ら心服す。世尊成道後卒技隣陀龍王の池に向ふ道に於て一の道士に遇ふ。優波伽と云ふ。世尊の相好と諸根寂靜なるを瞻みて奇特の想を爲して頌して云く、世間諸の衆生は皆三毒の爲に縛せらる、諸根亦輕躁外境に馳蕩す。然るに今仁者を見るに諸根極めて寂靜必らず解脱地に到り玉ふこと決定して疑ひ有ること無し、仁者擧ぶ所の師其姓字は何等ぞと。

釋尊が六根及び一切の擧身に威儀具足して缺くる處なきは是諸根調練の結果なり。今三昧を以て此身卽ち五根及び擧身悉く彌陀の靈應に充たしめんとするに三昧を以て常に身心を練らざる可らず。心外境に馳走する時は諸根寂靜ならず。水波浪を揚ぐる時は月影止まらざる如く、諸根寂靜にして彌陀の靈に合すに耐えん。

釋尊は勿論釋尊の敎團に入つて訓練を受ける徒は未だ敎團に入らざる者と同じからず。念佛者は如來の靈を容るゝ身器なれば三昧に依つて靈化せらるゝ故に五根自ら寂靜たるのみならず、法喜憚悅に充滿されるが故に心廣く體肝かにして佗の人と同じからざるべし。

闇黑の人を經に、中に不善の人あり、常に邪惡を懷けり。但嫉迭を念じて煩胸中に滿つ。愛欲交亂して坐起安からず。貪意守惜して但唐に得んと欲し、細色を眄睞して邪態外に逸なり。乃至恣心快意して身を極めて樂を作す」又縱奪にして放恣に遊散す、數唐に得るに串て用ひ自ら賑給す、酒に耽り美を嗜で、人の善あるを見ては憎嫉して之を惡む等。世の人は五欲の爲に五根を調伏すること能はず、故に

五欲の快樂を貪り此生理の機能なる五根を唯五欲の快樂を貪る器の如くに顚倒し、爲に益々苦と患との器と爲す。

三味の器をいかに調整すべき

世尊の如き諸根寂靜にして擧身全體が彌陀の靈德に充さるゝ器具と爲り玉へり。吾人は此器械的の官能及び凡ての筋肉髓等の生理的の機能を如何にして調整すべき。いかにせば如來の聖靈を盈滿すべき機能とならん。また機關構造完全ならざれば運轉完からず、我等が此身心は如來の聖意の電力に感じて運轉すべき機關なり。唯五欲を貪つて終身墮獄の材料を造るべき機關にあらず。就て此器械的の身體を平生に能く三味鍛練して能く調節せねばならぬ。

初めに諸根なる生理機能の機關を調練せざる可からず。工業家が機械の操術を練習する如く如來の聖意に運轉すべき機關の操縱を能く熟達せねばならぬ。

初、腦髓神經及び皮筋骨等のすべての生理的機能の調節の練習是彌陀の機關として諸根悅豫の元因と爲る。

二、姿色淸淨の生理的作用の習慣は一血液循環二呼吸の氣息此を能く生理的に順調に習慣を爲すべきである。

三、光顏巍々、三味定力を以て腦髓神經及び全體を統一して如來の威神力を受くる統一的威力である。此統一的威力は如來の威神力を被る機關である。

機關の完全なる裝置、運轉の脊油、全部機關の統一的調整、此に彌陀の恩寵また心光なる電力を以て機關運轉す。

諸根生理機關

大腦が百般精神機能の主府にして思慮感覺認識も皆之より出づ。此部が完全無缺なれば精神作用も亦完全、實に複雜なる器械的の諸作用も內外の刺激と併行す。故に若し之を破壞せば自ら主宰の機能を發することを能はざるに至る。

大腦皮質に五官中樞感覺の精神作用を主る部分あり。中樞と末稍との關係上三

種に別る。

一遠心性神經、二求心性神經、三中間神經、

遠心性神經とは中心より末梢に向つて傳播するもの、

一運動神經　二分泌神經（唾液汗腺等の）三營養神經（養分の新陳代謝等を以て發育させまた保續するもの）四制止神經（運動若くは分泌を制止するもの）

求心性神經とは興奮を末稍より中心に傳搬する作用

一知覺神經（特殊の末稍器より知覺を中心に奏するもの）

二五官神經（視聽舌嗅觸等の腦の皮質中樞と連絡して外界の刺戟を中心に傳ふる作用）三反射神經、鼓舞や運動等末稍より受けて中心に奏するもの、

中間神經、神經中樞を相連絡し興奮を交互傳搬して一齊運動及び反射作用等を媒介するもの、

神經は中樞と末稍とに分れ、末稍は渾身に散布する纖維である運動と知覺等の、

皮膚　爪毛髮

皮膚の脂肪は身體各部の陷沒を充塡し身體を修飾圓滑ならしめ、彈力ありて壓迫を防ぎまた溫濕を畜へ毒液の進入を防ぐ力强く表皮は薄皮脂層を被り身體の液政に緊要

皮膚呼吸

汗

運動器生理

筋

一遠心性神經　中心より末稍に向ふて傳搬するもの

一運動神經　中心（　）中心神經節

二分泌神經　唾液汗腺の如し

三營養神經　新陳代謝發育及び保續を主る

四制止神經　既發の運動若は分泌を制止するもの

二求心性神經　興奮を末稍より中心に向て傳搬するもの

一知覺神經　特殊の末稍器より中心に向て知覺を奏す

二五官神經　鼓舞運動等を末稍に受けて中心に奏す

三反射神經　神經中樞を相連絡し興奮を交互傳搬し一齊運動及蔓延性及反射作用をなすもの

三中心間神經

嗅神經、視神經、聽神經、舌神經、味……迷走神經

大腦精神機能

大腦半球百般精神機能主府思慮感覺知覺皆之より出づ。完全無缺にして完全なる精神作用あり、若し之を破棄すれば複雜なる器機諸作用內外の刺戟一致併行一も自宰の機能を發することなきに至る。精神機能は左右の兩半球に互り一半球傷すれは他半球之に代て機能を營爲す。兩半球損傷すれば腦質代つて機能を營爲す。

中腦

皮質五官中樞大腦皮質一定部に五官感覺の精神的認知を主宰するあり此部纖維

例へば壯丁が兵役中に能く兵士調練の結果として軍事に適當せる器となる如く、すべての人民が宇宙の一員たる小宇宙たる靈的生物として大如來聖意を實現すべき器に適するやうに練習するにあり。身體の三相と精神の五德は宗教的人類に必ず具備せざるべからざるの德相也。

二姿色清淨、血色氣色能く氣息を練習し氣海丹田に氣を養ひ靈氣に充ち邪氣去り神氣玲瓏玉の如く佛陀が金色の相貌はいか成る境遇に於ても毫も姿色變ることなし。

金屬の中に於て黃金は外塵の爲に酸化して銹を生ずること無きが如く、釋尊はいかなる場合にも姿色變ずること在まさず。其所以は彌陀三昧に融合して內靈に充ち玉へば常恒に快活怡悅姿色清淨にまします。

五　德

斯五德は宗教生活に一も缺くべからざる要德なり。故に教祖自ら念佛三昧の妙果を彌陀の萬德を人格的に顯現し、若し三昧を得て彌陀の露德に化する時は衆生其分に應じて五德は具すべきことを敎へ玉へり。

今日世尊住奇特法

世尊。神威靈德不可思議大威力あり大自在力あり無上の權威在ます。一切天龍八部

等の爲に尊崇せらる。故に世尊と云ふ。奇特の法とは世尊は神變不可思議者なれば種々神變奇蹟神通自在不思議感通力等を以て衆魔外道及邪見憍慢の徒を折伏した。攝化したまふ妙用あり。

大不思議者奇特の源

如來は宇宙一大神靈なる眞如の靈藏より現はれ來れり。故に如來と云ふ。宇宙一大神靈は不思議の靈德の淵源なり。絶對不思議者は卽宇宙の秘密藏に滿てる毘盧遮那如來なり。吾人の肉眼は宇宙絶對者の唯皮的表面のみより感覺すること能はぬ、然れども吾人の眼に視ゆる天體の無數の星宿が秩序整然として運行し地上の動植物が起伏隱顯生滅變化の極まりなき實に不思議なり。是靈妙者の働ならずや。

吾人は唯顯現せられたる方面のみを見てまた之を發展する絶對の內面は卽ち密藏界は識ること能はぬ。世に謂ゆる造化の妙用不思議である。世人が宇宙の謎に七の不思議あると云ふけれども實は萬有悉く一として不思議ならぬはない。

法身佛世尊奇特の法

世尊奇特の法に三位あり。一法身、二報身、三應身。

初めに法身佛は宇宙全一　世尊にして絶對的の奇特不思議の淵源なることを陳べん

法身佛は宇宙全體を一の世尊として其最勝者卽ち主權者である。宇宙全一の絶對なる如來法身には時間も空間も超絶して居るから十方も三世も超えて居る。然れども時間の本體と爲つて居る。法身は學語で眞如また實體等と呼んで居り、眞如と云ひ實體と云ひ、宇宙全體の本體に名づけたるものにて、若し之を宗敎的に表名せば法身佛また毘盧舍那如來と號く。法身とは宇宙には萬有に對して自然の大法則ありて大にして天體の有らゆる星宿の循環より地上の動植物の生理に至るまで細大となく自然の法則に係らぬ物はない。

有ゆる萬法の大原則にして宇宙全體を統一して居る本體の故に法身と云ふ。そが一

大靈格の故に法身佛と名けたり。毘盧遮那とは梵語にて譯すれば遍一切處と云ふ。宇宙全部に渡れる一切の物質（地水火風空）と一切の精神の統一的存在にして、宇宙全體を以て身として居ると云ふ義である。宇宙萬有が悉く大自然の法則に支配せられて秩序あり條理あるを見れば之が統一攝理の大主權者なくてはならぬ。法則に天則と人爲則とあり。天則とは天に行はるる大自然に本然として行はるる則にて、人爲則とは立憲政の國家には人民が相互に協議して建設する人爲の法、憲法民法刑法等の有らゆる規則である。此人爲則にも主權者が有つて其統攝の下に於て人民間に其規則が行はるる。天則にも主權者がなくてはならぬ。萬物の規則の整然たる天の星辰の環の如きも萬古に易らず、火の熱溫水の潤濕の物理にしても、眼は視え耳は聽き養分を以て身を養ふ生理にしても古今に變ぜず。斯の如き天則の實に神聖にして侵す可からざる萬代千古に通じて換らず。

世に之を天命と云ひ天則と云ふ。天何と言はんや四時行はれ百物生ず。此一切萬物の天則の一切原理を佛敎の學語にて眞如或は法性と名づく。萬法は悉く法性に支配せられ眞如の理に由つて行はるるとす。之を宗敎的に云はば法身佛の理法に隨ふと云ふ。故に法身は一切萬法の主權者にて天の萬物一として此一大權威の下に隨順せざるはなし。故に宇宙全一の世尊を法身佛とす。

法身の奇特法

一大神靈としての宇宙は實に不思議なり、絶對に不思議なる者は卽ち宇宙秘密藏なり。吾人の肉眼は絶對者の內容を窺測すること出きぬ。肉眼に映ずる、皮相より見ても天體無數の星宿は羅列し、地上に起伏隱顯生滅變化極まりなき、實に不思議である。吾人は唯發現せられたる自然現象界の舞臺の方面のみ見ても實に奇妙である。世に謂ゆる造化の妙用など云ふ、不思議である。宇宙の謎は解き得ぬ。絶對者の內面卽ち樂屋の裡を窺くことは出きぬ。宇宙の不測に就ては怪力亂神を語らぬてふ孔子も彼は喟然として嘆せざるを得なかつた。卽ち、逝く者は夫れ此の如きか晝夜を舍てず。又、

天何と言はんや四時行はれ百物生ず。又上天の載は音もなく臭もなしと。君子の道は費にして隱なりと。是等の言は或物に對する感想の發表でなからうか。ベーコンが哲學は少しく學ぶ時は無神論に陷るけれども深く研究する時は實に九苞無窮の玄邃高遠なる、人智の甚だ微にして數ならぬ、無限者に對しては、唯長敬款伏の外なきに至ると。

宇宙秘密藏から一切の天地萬物の現象は發現せられたのである。數多の子が母の胎內より生產出される如く宇宙の如來藏の胎內より產出されたる萬物である。太陽も一切の星辰も地上の一切の生物も其本は悉く如來藏より產出されたのである。密家にて大日の胎藏などと云ふも宇宙秘密藏の胎內から一切萬物を產出すといふ意味である或學者は宇宙全體は大なる頭腦であると云つて居る。不思議ではないか、如何に吾人の腦は小さくても如來藏と云ふ宇宙全一の頭腦から產出れたる一の頭である。故に此の小さな頭腦の中にも博聞强記の頭には古今に亙り廣く世界に亘る印象を記憶して居る。天才の詩家の頭からは奇奇妙妙の句を無限に造り出す。增してや一切頭腦の一大根源たる宇宙全一の大頭腦よりは久遠劫の昔より靈未來の際まで宇宙一切の現象を常恒不斷に千變萬化無限の事物一切を現出して止むことない。現象界は悉く全一宇宙の靈藏より常恒に發現せられつつあるにあらずや。

絕對者が常恒不斷に建造し造營し變化し破壞し何一つとして不思議ならざるはなし。

宇宙の大秘密藏の不思議なる而かも此一切の複雜にして千變萬化極まりなき中に一定不變の條理あり秩序ありて行はる。決して天則の理法を侵すことなきは卽ち法身世尊の大權威にして千變萬化不思議の顯現は是法身奇特の法によれるなり。

報身の世尊と奇特の法

先に法身は宇宙全體を擧げて其體とす。宇宙一切の現象界は其現象の一皮面に過ぎ

す。其絕對の秘密の內容は凡夫の肉眼を以て窺測することは出きぬ。僅か一分子たる人間の頭腦に於てさへ其內容の微妙の觀念感想は外より疑ふこと能はざる如く、增して況んや絕對者の內容秘密藏に於てをやと。

宇宙全體の中心を以て獨尊と云ふことをのべて次に報身の不可思議を明かさん。宇宙全體が卽ち法身の體にて其中心の本尊なくてならぬ、卽ち淨滿如來である。

全體には必ず中心があると云ふ事は吾人一個體が小宇宙として此の個體に五體五官五臟六腑乃至無數の細胞聚りて一として缺くべからざる物である。然れども其れを統一主宰する中心なくてはならぬ。卽ち自我が一切の身と心との凡てを統一して居る。

自我精神が卽ち一身の中心主宰者である。一個身を集めたる一家には家長ありて一家を統一して中心となつて居る。一國には皇帝若くは大統領ありて一國民を統一して主權者と成つて居る。天體には太陽が中心主宰と成つて八の惑星數多の星宿を統率して居る。自然界に天體に太陽が中心たる如く絕對なる心靈界としてなくてならぬ中心は卽ち無量光如來である。無量光如來は一切心靈界の太陽である。喩へば太陽は自然界の萬物の中に於ても最も偉大なる熱力を以て星宿に臨むに地上の萬物を養成する如く、無量光如來は靈界の太陽として一切衆生の心靈を開發し靈化する處の大威神者である。

心靈界に無數の諸佛在ませども無量光如來は一切諸佛の中心最勝者である故に、經に無量光如來の威神光明最尊第一にして諸佛の光明及ぶこと能はざる處なりと。

報身の奇特法

宇宙は吾人が肉眼に視ゆる方面を自然界と名づけ、絕對の內面聖人衆が佛眼開きて觀見すべき方を心靈界と名づく。肉眼に見ゆる自然界の方は悉く法身佛から相待的の因緣因果の世界の方面に現出の萬物なれば悉く不可思議である。法身佛から因果的に產出されたる衆生界である。生物界の內最も精神的に進化したる人類とせば、世界の生滅變化の方より一轉して絕對無限の如來の自性の靈妙の境界に證入することを

得らるる性能を具有されて居る。實は佛教の目的は、人生の歸趣する處は其方面である。

法身は一方には世界の因緣因果の方面に產出して極少の生物より漸次に進化せしめて人類の如き精神的に進化したる者にして世界有限の生死界より絕對無限の靈妙不思議なる常樂我淨の光明界裡に攝取すべき奇特の法を以て衆生を攝化したまふ。奇特の法をまた妙法とも云ふ。實に妙法である。法身から世界の方面に衆生界を產出して生滅變化極まりなき造化の妙用も不思議であるけれども、此生滅なるものゝ內面の根本に悟入して生死の源には生死を超えたる絕對永遠の大生命を根底とし、實には生死は無しと云ふことを自覺して、生死卽永恒常恒の涅槃を證得した上には生死の恐るべきもない。然れども無明の凡夫には然らず。爰に於て教主釋尊が不思議の根本妙法の本體に深く悟入して絕對の內容秘密の寶藏を開きて無量光如來の光明中に入るべき道を開きなされた。

宇宙の不思議者に對して世の哲學者科學者等と釋尊とは其關係を異にして居る。世の學者も大自然の法則に對しては天體の行はるるも人類の死生も其究極は唯自然法の然らしむる處天則によるのみ、故に自然法卽ち天則には人間は唯服從する外なし。吾人が天地間に生るるも死るも自然の法、眼の視え耳の聽ゆる是天則、故に吾人は天則に抵抗すること能はずと。實に然り。彼等は天則に服從し天則の奴隸である。唯消極的に隨ふのみ。天命は我等いかにかせんと云ふのみ。

我教祖が夫等の輩と一頭地を拔んでて、大宗教家たる處ここにあり。教祖は天の働きを唯客觀的に天の向ふに見ずして天則の本體、我精神と同じき我大なる父であると。冥想によりて絕對其ものの深き深き內容に融込みてアララ仙扨が見て居た非非想天扨も悉く照破して無我の極頂天に入り、生死の源罪惡の根底を亡ぼし、之が爲に絕對なる盧舍那圓滿（無量光）暖なる慈愛の懷に暖められて光明に融込みて卵の孵化する如くに初めて靈性の覺醒して無明の夢さめて無上正覺の眼が覺めて見れば絕對の靈界にして、無量光如來の太陽は悉く十方法界の衆生の心靈を照して眞善微妙の樂苑に常樂我淨の花匂ふ。

教祖が無量光の日光に正覺の眼覺めて十方法界を觀見する時は實にまた不可思議である。此奇妙はまた妙にして妙一切衆生をして悉く絕對不思議光明を以て心靈に復活せざるべからざる動機となせり。

釋尊が此小我が舍那圓滿の大我の中に融込みて全く無我の頂天と成つて正覺の眼覺めて見れば、遮那の光明に合したる內觀は絕對無限である。此無限大我の無邊の如來聖德は自覺の精神に融込みて來る。曾に之を內的觀念のみでない。融合したる內感の妙味は決して大我と自己とは別々のものとは想はれない。爲が釋尊が大宇宙に對する關係が他の學者と趣を異にする處、釋尊は宇宙を研究の材料として居らぬ。絕對の內面と自己との融合、絕對に活きんことを目的として居る。

釋尊は自ら絕對の內面宇宙最大靈福と最大道德との最尊者とを覺りてすべてにすむるに無量光如來に歸命して無量壽の涅槃に入るべき道を教へなされた。

無量光如來を以て最尊第一とし其威神力を以て不可思議功德を稱讚し有らゆる大乘經に阿彌陀如來の不可思議功德を稱揚し讚嘆したまふ。不可思議功德は一切衆生を無明と罪惡と苦惱の中より脫して諸の聖人と同じく靈化したまふ故に報身佛は最尊第一にして不可思議功德者と稱し玉ふ。

應身の世尊と奇特の法

一切人類中佛陀が最も世に尊き所以たる、佛陀は宇宙絕對權威者の權化である。人爲則の主權者が國長を統御する如く、佛陀は天則と及び靈界の妙法の權威者である。故に絕對の統御者の人格現である。

佛陀は宇宙最尊の彌陀より分身して世界の心靈の尊者として地上の一切心靈を攝し教化し彌陀の慈悲の手に渡すべき權能を有する故に世尊不思議功德の大權威者の故に

世尊なり。又世尊大自在者である。大權威である。言の如くに火も焚かじと曰へば火も燒くこと能はず、水も命令の下に流を停む。一切の事が道の如くに命令に隨ふ。世尊は大自在者盧遮那の權化なればなり。

梵網經に我今盧遮那と。我とは八自在大我と天台は釋せり。大我の人格現の故に佛陀は世尊なり。世尊は此地上に於て一切の人類の上に立つて一切の衆生を教令の下に度し玉ふ大權威者、佛陀は念佛三昧に依て遮那如來と合一して遮那の滿德を以て人格を莊嚴す。無限の大威神者である。

世尊と大宗教家

佛陀が大宗教家たる所以は、全體宗教とは如何なる義ぞ。宗教とは宗教的關係にて宇宙全體中の中心たる最尊者と、小宇宙たる人の腦中の中心たる靈性との合一親密なる關係によりて、大靈の最尊崇むべき威神力大慈悲と大智慧とに由つて人の靈性が開發せられ靈に復活す。

無量光は太陽の如く靈界の最尊たり。人の精神の靈性は個體の尊き處、此神秘的の融合によつて靈性が復活す。故に宗教心は宇宙最尊の靈性に自己の心靈充さるゝ處に宗教心成るとす。

本來宇宙最尊の無量光如來の光明は顯赫にして十方に照り輝くけれども自己靈性の未だ開發せざる人は見るに由なし。日光は照せども盲者は見ること能はずと論註に示せり。小宇宙の靈性は尊貴の性である故に大靈の尊性を信知することが得らる。大靈の神靈に靈化せらるゝが故に大靈の尊き性を認信す。人類已下の動物の頭腦は未だ宗教的の靈性が發揮せざるが故に宇宙の尊さを信認すること能はず。亦縱令形は人類たりとも頭腦に宗教的の靈性未だ開發せざる人はたとひ知識はいかに發達しても宗教的の尊き靈性が未だ發開せざるが故に大靈の尊性を感ずること能はざるなり。又喩へば鑛物の、天に日光は照せども瓦礫には反映の力なし。若し金剛石や玉の如くならば日光反映す。瓦礫には貴重なる日光を映寫する性なき故に無宗教者の靈性なき者に感

せず開けし靈性は寶石や寶玉の如くに自己の尊き靈性發揮するが故に宇宙の大靈を尊崇するし其光明を反映することを得。實に是不可思議功德也、奇特也。

佛陀の入山學道

世尊佛陀が世界の最尊たる威神者として衆生に儼臨したまふに威神力を以て奇特を現す。奇特に權あり實あり、是に手段と目的となり、佛陀が身上より火を出し身下より水を出し火に入れども焚けず水に入も漂ざる如きは卽ち權方便にして、衆生の邪見我慢等の心を降伏して正善の心に化したまふは是實なる目的なり。

佛陀が正覺を成じて彼の迦葉等を度せんと欲して尼連禪河の邊なる優樓頻螺迦葉と云事火婆羅門の家に訪ふて一夜の宿を求めて一夜毒龍石窟に宿り玉ふ。大毒龍王怒りて毒火を以て世尊を害せんとす。世尊は結跏趺座し正念動じ玉はず、口より神力の靈氣を出して毒烟を消し玉ひ、火光三昧に入つて毒龍を調伏し三歸を授けて鉢の中に納む。迦葉之を見て世尊の奇特に感じたれども數多の弟子に、年少の沙門奇特なりと雖も我得たる道の眞なるには如かじと。其より弟子等が事火の薪を割るに斧を執れば斧揚らず等種々の奇特を現して老迦葉を度せんと欲すれども彼は其度毎に自ら謂ふ、年少の沙門奇特なれども我道の眞なるには如かじと。或日迦葉が弟子と共に船にのりて尼連禪河に浮ぶ。世尊今日は之を度せんと欲して先に禪河に入り神力を以て水流を兩方に流し其中を歩み、其河中塵を揚ぐるに兩邊は水瀑浪高く揚れり。迦葉船中に在りて世尊の歩む處水無きを見て希有の想を爲し驚きて曰く、沙門よ此船に乘り玉ひては如何と。世尊諾し玉ふに忽ちに船底より現じて結跏趺座し玉ふを見て益々其奇異に感じたり。然れども尙自ら謂ふ。年少の沙門實に奇特なりと雖も我道の眞なるには如かじと。慢ずる心尙止ざりければ世尊告げて曰く汝阿羅漢にあらず又阿羅漢道にあらず然るを尙自ら恥慚とせず、自我道を得たりと云ふて大我慢を起す、豈愚なるに非ずやと告げ給ふに、迦葉此の勅を承はり驚恐措くこと無く、身毛豎竪ちて稽首して白さく、六道人實に奇妙なり我心を知り玉ふ。唯願はくば我を度し玉へと。竟に五百

の弟子と共に世尊に歸依して弟子と爲りぬ。次に那提伽耶の二弟子も其弟子と同じく佛弟子と爲りぬ。久しからずして皆阿羅漢果を證し三明六通八解脫を得たりと。是佛陀が始め神變奇特を現はして迦葉等を降伏したまふ。然れどもそは方便にして目的は彼等が解脫の道に非ざるを眞の道と謂ひ未だ得道せざるを已に得道せりと謂ふ其闇き心を降伏して正眞の道を以て化度し玉ふ處にあり。

復王舍城の人民が年少の沙門に老迦葉の弟子と爲りしを疑ひたりき。佛陀は其等の疑を解しむる爲に百千大衆の前に於て老迦葉に命じて諸の神變を現せしむ。虛空に昇り身上より水を出し火を出し乃至十八變を現ず。衆之を視て驚きて未曾有を感じ佛陀に歸依するもの數多なりしと。又舍利弗神變を現じて舍衞國の外道を降伏せしことあり。

須達長者が王舍城に於て深く佛陀に歸依し舍衞國に於て凭の如き眞の敎を以て人民を敎化せば利益大ならんと。世尊に請ふに精舍を建立せんに諸の外道等必ず之を拒むならんと。外道を降伏せんに諸の弟子の中に有力の弟子を使さんことを乞ふに、世尊は舍利弗を遣して、須達と共に赴かしむ。諸の梵士等舍利弗に對論せんが爲に赤眼梵士を選みて鬪角せしむ。廣き勝地に於て舍利弗と神通力を鬪爭す。無慮百千の人集まれり。舍利弗外道に告ぐ我宗を建て汝破すべきや、汝の宗を我破すべきや、赤眼曰く我先に宗を立んと。赤眼方術を以て大菴摩羅樹を生せしむ。忽ち成長して爛漫と花開き果結ぶ。衆皆驚嘆す。舍利弗大風雨を起して彼の樹を倒し、枝葉折萎みてつひに散じて形だもなし。外道廣地の中に蓮華を開かし色香だも妙なるを現はす、人々皆愛玩せざるなし。舍利弗象を化作して忽ちに花を履み荒し池は本の地となりぬ。外道七頭の龍王と現はれば舍利弗金翅鳥と化して龍を喰はしむ。外道起屍鬼を化して舍利弗に向はせて飛びかゝらしめんとす。舍利弗呪文を誦すれば還つて外道の方に廻りて害せんとす。赤眼大に恐れ驚きて自己を忘れ座より下り五體を地に投じて舍利弗を禮して救を求む。竟に外道佛法に歸して出家し具足戒をうく。此に於て大に佛法

の偉力に感じて佛に歸する者多く竟に祇園精舍を建て佛敎を舍衞國に宣傳せりと。

滅後佛徒の奇特

唐の善導の傳に師西京寺の內に於て金剛法師と念佛の勝劣を校量したまふ。高坐に昇つて遂に發願して言く諸經の中世尊の說に準するに、念佛の一法淨土に往生し得ることを說く一日七日一念十念阿彌陀佛、定んで淨土に生ず。此是眞實にして衆生を誑かさずば卽ち此堂中の二像をして惣じて皆光を放たしめ玉へ。若し此念佛の法惡にして淨土に生せず、衆生を誑惑せば卽ち善導をして此高坐の上より大地獄に墮して長時に苦を受けて永く出期なからしめよと如意杖を持つて一堂中の像を指すに像皆光を放つと。

長安の屠兒寶藏、師の勸化が長安に滿ち肉を斷つて人買ふ者なし。遂に刀を持て寺に詣り、竟に師を害せんと欲す。師之を見て西方を指示して淨土の相を現ず。卽ち發心して身命を捨て淨土に生せんことを誓ふと。

法然上人の傳に上人月輪殿にまゐり給ふて數刻御法談ありけり。退出の時禪閤庭上にくづれおりさせ給ひて上人を禮拜し御額を地につけて良久しくありておきさせ玉へり。御淚にむせびて仰がれて曰く、上人地を離れて虛空に蓮花をふみ、後に頭光現じて出で給ひつるをば見ずやと。左京權大夫入道戒心中納言阿闍梨尋玄二人御前に候ひける皆見奉らざる由を申す。其後彌佛の如くに敬ひけると。斯の如き古今に亘りて奇特の事多し。

信仰に現はるゝ奇特

宗敎は奇蹟を以て初門とし又終局とす、世には宗敎は奇蹟を全と謂へり。然り而して其奇蹟にまた程度あり。自然の物質的に現するあり、超然的に精神界に現すあり。基督の經書にも種々の奇蹟を錄せり。是疑ふべきに非ず。一片のパンを數千人に飽かしめて尙餘れりとの如き、觀音の普門品に一心に觀音の名を稱せばたとひ大火に入る

も火も燒くこと能はず、大水の中にも淺處を得、害せらるゝに臨むとも刀杖段々に壞して免るる、一切の厄難十四無畏の如き一心に觀音の力を信仰して疑はざる時は必ず不思議に其厄難を免れ解脫を得ること疑ふ可くもあらず。

或は信心の奇特として生盲者が明眼と爲り跛者が起つことを得る如き、また信ずべきことなり。

世人動もすれば凭の如きを奇特と信じ尙進んで宗敎の眞實の不思議をば左まで感せざるは何ぞや。一生造罪の惡人臨終に獄火現前すれども改悔の一念に獄火變じて淸涼の風と爲り金蓮花日輪の如くに現じて往生すと。

或は凡夫の染汙の心は大海の水を傾けて濯ぐも淨め難きも一心に稱名して如來の淸淨光に浴すれば忽ちに轉じて淸めらる。餓鬼道に墮落する弊惡の心も轉じて光明の生活に復す。煩惱深重の凡夫を正定聚の菩薩と化し生死常沒の衆生を涅槃常樂の佛子と化す。無明暗黑の生命を永遠の光明の生命と靈化す、悉く是如來の大威神の然らしむる處、是眞實奇特中の奇特妙法の妙なり。

（奇特に方便と目的）

彌陀の光明に滿たされたる敎祖釋尊

我等が敎祖釋尊は彌陀の光明に滿されたるまた彌陀の聖意に活きる一切の人にして彌陀の光明に充さるれば何人も凭の如くの人格と爲り得らるゝといふ模範を吾等衆生に示しなされた。吾人は思ふ無量壽經の序文に釋尊は自から彌陀の人格現とし、譬へば西に日は入るも光は月に映る如と、彌陀光王の日光は牟尼滿月に輝けり。

此頌は彌陀の光明に滿たされたる釋尊の御相の上に現はれたる姿を頌したのである。例へば中秋の淸霽に東山の天に皎々と現はれたる滿月の冴えて輝くのは、其實には此地球からは見えぬ西に入りたる日光が月に映て、夫で皎々として照してをるのである。それの如く、肉體を以て人間と爲られた釋尊の御相にも御意にも、實に神人の德を以て日月の光さへも隱蔽る程に、御人格の立派な御方が世に出玉へるは、釋尊の人格の光を爲す。其本原は凡夫の肉眼にては視ることできぬ。

上界に在て威神光明圓かに照し玉ふ彌陀如來の光明が釋尊に映寫して凭の如くの威神無極の人格と現はれなされたのである。爰が宗敎心には最も大事なことにて、釋尊が自から模範を示し玉ふて何人も彌陀の光明に靈化せらるゝ時は、其分に應じて光明喚發する人格となり得らるる。釋尊出世の本懷は一切の人々を彌陀の光明に靈化させて光明的人格に復活させんが爲である。

世尊奇特の法は、佛陀は世界已上の絕對の光明界より、世界に出て世界の眞理を悟らしめ、すべてを光明中の人とせしめんが爲に天尊は世界の衆生を生死の世界より拯出して永生常樂の涅槃界に歸入せしめん爲の目的を現はし玉ふ。故に佛陀の敎に隨て絕對的に彌陀に歸命して、如來の德に隨順する時は、身は生死の世界に在り乍ら、神は永生常樂の人と爲り、如來の中の人として分に如來の德を行ふやうに爲る。故に身も心も共に如來の行爲を分に實現するやうに成り、之を天尊如來の德を行

すとす。

初は絶對より世界に出たる佛陀、終には生死の世界より絶對の光明の中の人として、永遠の生命即ち極樂に導びき、世のすべてを聖き人とする處にあり。

高尚なる理想

世の明王と云ふ如きは假令賢明なりと雖も王位を得ざれば人民を命令の下に動かすこと能はず、故に國大なれば帝王も大、國小なれば主權者が小なり、富豪の偉なる所以は其人格に非ずして財にある如く、今佛陀が世に尊き所以は世の爲めに尊きにあらず世に超絶して尊きなり。故に佛陀は靈の尊きを知らしめんが爲に世の國を捨て王位を捨て（還一與一）と爲りて自己人格の光明を發揮なされた。王位を得て尊きは大靈の光明を得て聖靈的に尊きに如かじと王位を土芥の如く捨て奮然として起つて山に入り有ゆる勤苦を以て身心を鍛錬し玉ふた。いかに大なる寶石も琢磨せざれば靈性發揮し難し。靈性發揮せざれば大なる靈日の光反映することなしとて、一向に苦行を修し竟に苦樂を超絶して身心寂靜三昧凝神に心靈の寶石を磨し得たり。神靈なる無量光の威神の日光は佛陀心靈の寶石に反映し實に世尊なり。奇特者なり。

奇特は超勝獨妙である。佛陀は太子の時より理想の高尚なる希望の遠大なる太子が王位を棄てたるは超勝獨明の覺位に就かんが爲たり。彼の三軍の力を假りて覇を爭ふ英雄と其撰を殊にす。太子弱冠にして高く無上菩提の志を發し最上の妙法を得て一切智の光明普く十方三世を照らし而して一切衆生を無明と苦惱の中より救出し永遠常樂の光明に安んぜしめんとの理想、又一切衆生を一慈悲の光明に攝めて復活せしめんとの希望は實に遠大である。佛陀は自ら覺を得てよりは一切衆生には肉より見れば罪惡の凡夫なれども内に伏する靈性は一切に超勝せる尊き物あることを知らしめ其靈の尊さを復活させんと思召して其徒に敎へて曰く『汝等は最も尊き靈に活くべき佛子なり、靈の尊きを自覺せよ、されば國王に禮せざれ亦父母を禮せざれと示されし亦身は國王は國に於ての最尊位父母は家に在て貴とし此等は最も貴み敬禮すべき物なれ共、靈の尊き如きに非ず。故に靈の尊きを重んじて國王及び父母も敬禮するに及ばずとす。汝等は宇宙に輝く無上靈位の光に依て生れたる佛子なればなり。

されば佛滅後に印度に於て古今獨歩の大威德王あり、阿育と名づく。王は初波羅門を信じて佛法を破壞せんと企てたりしが深く感ずる處ありて大に改悛して竟に佛法の弘擴の外護を爲したり。王は眞實に佛法は宇宙に輝く靈法なるを信じ、佛徒の頭腦には靈に活けるものの存在を信認して、自ら王位の尊に在れども一切の沙門を敬禮すること最も殷であつた。靈に活ける彼沙門等は無我にして王の敬禮を受くるも毫も誇の心なかりき。靈に活ける佛徒は超勝獨明の靈を自重すれども我慢の惡德にして謙德の重んずべきことを知る。佛陀の前世に常不輕菩薩の時、一切の人貴賤高下の階級に拘はらず何人に向つても至心に敬礼して汝等當來皆當作佛と稱へて禮拜す。中に邪惡の輩あり還て罵詈し瓦礫を投て之を打つ、菩薩は遠く逃て此人の其影を見て尚苦心して敬禮して止まずと。凭る惡性弊垢の族にも尚禮拜する所以は此等は現在は弊惡なるも内に潛伏する佛性ある故こ當來に於て作佛すべき、靈性あるを敬禮す。自己の靈性の自重の日には國王及び父母と雖も敢て禮を設けず、然るに自ら謙德を重んじ、佛性を尊みてはいかなる下賤の者に對しても敬禮す。

昭和六年一月二十三日印刷
同　一月二十五日發行
誌代年貳圓（郵税共）
編輯兼發行人　山崎辨成
東京市小石川區小日向臺町三丁目
印刷人　春山治部左衞門
發行所　東京市小石川區水道端二ノ四四
ミオヤのひかり社
振替東京六六八五一番